

## メタ言語的使用の多様性と会話的推意

小田拓弥

無所属

明示的に引用や言及がなされる場合とは別に、ある言語表現が使用されているにもかかわらず、その表現自体に関する伝達が行われているようなケースが存在する、と指摘されることがある。

例えば、「背が高い」のような段階的述語のメタ言語的使用が挙げられる (Barker 2002)。「太郎は背が高い」という文は、太郎の背丈の程度を知っている聞き手に対して用いることで、話し手がどの程度の基準で「背が高い」という表現を用いているかについての伝達をするために用いることができる。

段階的述語だけでなく、否定表現 (Horn 1989)、総称文 (Krifka 2013)、信念報告文 (Berg 1988) などについて類似の用法の存在が指摘されその性質が研究対象とされたり、特定の種類の表現に限らず一般的に見られる言語現象として取り上げられたりしている。

近年では、メタ言語的使用を介して、ある表現がどのような意味で用いられるべきかについての論争が非明示的になされるケースが、David Plunkett と Tim Sundell によってメタ言語的交渉 (metalinguistic negotiation) と名付けられ、概念工学や美的述語の意味論などとの関連で注目されている (Plunkett 2015, Plunkett and Sundell 2013)。

本発表では、メタ言語的使用と言えるものの中にも、発話の文脈、使用される言語表現の種類、扱われる対象の種類などの観点から多様な例が含まれるということを述べる。そして、それらの違いはこうした現象の意味論や語用論の上での扱いの違いをもたらすということを、メタ言語的使用を Paul Grice 以来の会話的推意として扱うという考え (Belleri 2017, Davis 2005/2019, Sundell 2009) を題材に論じたい。